



 Data	2024-78
監督	ジョナサン・バン・トゥレ ケン
原作	ジェームズ・クラヴェル 『Shogun』
出演	真田広之／コズモ・ジャーク イス／アンナ・サワイ／浅野 忠信／平岳大／西岡徳馬／ 二階堂ふみ

👁️👁️ みどころ

2024 年 9 月 17 日付新聞各紙は一面で「日本の魂がついに天下を獲った」「エミー賞®作品賞〔ドラマ・シリーズ部門〕を含む史上最多受賞!」と報じた。主演・プロデューサーの真田広之の長年の努力が一気に花開いた瞬間だ。日本人の多くがそんな本作に熱狂したのは当然だが、1980 年に 5 日連続、計 547 時間で放映された TV ドラマの面白さに魅了されていた私にとっても、大スクリーン上で新たに公開される本作は必見!

もっとも、司馬遼太郎の小説『関ヶ原』(66 年)を熟読した上、信長、秀吉、家康と続く激動の歴史を熟知している私には、石堂和成が吉井虎永との間で“五大老対決”を展開する本作のストーリーは意外だ!他方、本作に見るカトリック(ポルトガル+スペイン)VS プロテスタント(イギリス+オランダ)の宗教対立と植民地獲得競争は史実に即している。それをしっかり勉強しながら、波乱万丈のストーリーを楽しみたい。

他方、本作で主演女優賞を受賞したアンナ・サワイ演じる戸田鞠子は、史実上は明智光秀の娘・細川ガラシャ夫人だが、彼女の果たす役割は?また、虎永から三浦按針の日本名を賜る英国人航海士はなぜ「黄金の国ジパング」を目指したの?また虎永の旗本としてどんな役割を果たすことになるの?第 1 部と第 2 部だけでも十分面白いから、第 3 部以降への期待は高まるばかりだ!

■□■エミー賞®の超話題作を受賞記念上映!こりゃ必見!■□■

2024 年 9 月 17 日付新聞各紙は、一面で、「日本の魂がついに天下を獲った」「歴史的快挙!エミー賞®作品賞〔ドラマ・シリーズ部門〕を含む史上最多受賞!日本人歴代最多受賞!」の大見出しを掲げ、『SHOGUN 將軍』がエミー賞®で作品賞、主演男優、主演女

優を含む史上最多 18 部門を受賞したことを報じた。その小見出しは、「世界が大熱狂する戦国スペクタクル」「米国を夢中にさせた どこを取っても最高のドラマ」「日本人歴代最多受賞も達成 時代劇が席卷する時が来た」「米国で社会現象化 アンナ・サワイに大熱狂」「東西の壁を越えた プロデューサー真田広之」等だ。

もちろん、これは新聞紙面一面を買い取った一大コマーシャルだから、そこにはディズニープラスで「スタンダード年額プラン1年目 39%OFF 2年目以降通常価格 9/28(土)まで 今すぐ入会」「ディズニープラスで全話独占配信中」等の宣伝文句も躍っていた。そんな宣伝戦略にまんまと乗せられてディズニープラスに入会した日本人も多いだろう。しかし Netflix 等の動画配信サービスに興味のない私はそれを完全に無視していた。すると、「待てば海路の日和あり」のことわざどおり、テアトル梅田が本作を 8 日間限定で「エミー賞®受賞記念上映」することになったからラッキー！株主優待は使用できないが、シニア料金は 1,300 円だから安いもの。当日のチケット購入では満席になるかもしれないと考えた私は前日にネットで座席を確保したが、案の定、入場前は長蛇の列だった。東宝系での上映と思っていたが、テアトル梅田がこんな粋な企画をしてくれたことに大感謝。

■□■原作は？登場人物は？TVドラマは？日本の放送は？■□■

本作の原作は、ジェームズ・クラヴェルが 1975 年に発表した小説『将軍』(原題は Shogun)。そして、これを原作とするアメリカの TV ドラマが 1980 年に、リチャード・チェンバレン、三船敏郎、島田陽子らの主演で制作され、9 月 15 日から 19 日まで 5 日連続、計 547 分で放映された。また、原作の日本語訳は、1980 年に全 3 巻で刊行されるとともに、劇場映画版が 125 分に編集され、1992 年に日本で公開された。また 1981 年には TV シリーズ版が日本のテレビ朝日系列で 3 月 30 日から 4 月 6 日まで 8 日連続で放送された。

1981 年 4 月といえば 1979 年 7 月に独立した私にとって 1 年半を経過したところだが、初期投資として分不相応ともいえる立派なコピー機とファックスを購入し、さらに当時発売を開始し始めたワープロ (ワードプロセッサ) がそれまでの和文タイプに取って替わると目を付けた私が、大阪で 3 台目のそれを 300 万円で購入したところだった。したがって、そのため小西六写真工業 (現コニカミノルタ) が特別協賛し、業務用複写機「ユービックス」を冠にした「ユービックス ビッグゲスト・イベント」として放送された同作を、私はすべて鑑賞した。ちなみに、この放送直後、私は縁あって今や超優良企業に成長した株式会社オービックの大阪支店の顧問弁護士に就任したが、最初の挨拶の時、私は株式会社オービックとユービックスを間違え、「あの TV ドラマの協賛スポンサーの会社ですね」と、トンチンカンな話をしたことを今でもハッキリと覚えている。

それはともかく、原作の最大の特徴は、実在の人物を架空の人物に置き換えていること。本作の一方の主人公は、イギリス人の航海士ジョン・ブラックソーン (コズモ・ジャークヴィス) だが、彼のモデルは三浦按針という日本名を賜ったウィリアム・アダムスだ。また、もう一人の主人公は、後の征夷大将軍、徳川家康をモデルにした吉井虎永 (真田広之) だ。

また TV ドラマでは島田陽子が演じ、エミー賞®を受賞した本作では主演女優賞を受賞したアンナ・サワイが演じた女性、戸田鞠子は史実では細川ガラシャに該当するが、ストーリー全体における鞠子の役割は？

TV ドラマは全 547 分の長尺だから、上記の 3 人を主人公にした複雑で波乱に富んだ物語も丁寧に観ていれば十分理解できたが、2 時間程度に編集された劇場版だけでは、架空の人物が次々と登場してくるストーリーの理解は難しいかもしれない。幸い今回鑑賞した本作は、エミー賞®を受賞した TV 版の第 1 話と第 2 話の計 128 分だから、最初は事実に沿った名前と架空の名前の不一致に戸惑っていたが、少しずつ慣れてくることに。

■真田広之のハリウッドでの成功物語は？彼の偉業に拍手■

1960 年生まれの実田広之は 6 歳で子役デビューしているから、俳優歴は長い。私が彼を初めて知ったのは 1984 年の『麻雀放浪記』を観た時だ。1979 年に独立して「坂和総合法律事務所」を開設した後、昼間は弁護士家業で、夜は北新地通いでメチャ忙しかったが、大橋巨泉が司会する人気 TV 番組『11PM』で定期的にやっていた「マージャンコーナー」を必ず見ていた私には、阿佐田哲也の原作を映画化した『麻雀放浪記』（84 年）は必見だった。彼の演技力に魅了された私は、1991 年の NHK 大河ドラマ『太平記』をしっかりと鑑賞したし、その後に彼が主演した『ラスト サムライ』（03 年）（『シネマ 3』137 頁）、『亡国のイージス』（05 年）（『シネマ 8』352 頁）、『上海の伯爵夫人』（05 年）（『シネマ 12』288 頁、『シネマ 17』214 頁）、『ジョン・ウィック：コンセクエンス』（23 年）（『シネマ 53』55 頁）等をすべて観ている。

私が強く印象に残っている映画は、『柳生一族の陰謀』（78 年）、『忍者武芸帖 百地三太夫』（80 年）等の時代劇だ。そこで彼に役立ったのが、千葉真一が主催するジャパンアクションクラブ（JAC）で学んだアクション術。JAC では志穂美悦子が『女必殺拳シリーズ』で大人気となり、私もそれを楽しみに見ていたが、師匠の千葉真一と志穂美悦子と共演した『柳生一族の陰謀』がメチャ面白かったのは当然だ。

そんな実田広之の“世界進出”は、千葉真一のアドバイスと『ラスト サムライ』（03 年）への出演が契機になったらしい。①1999～2000 年にはイギリスのロイヤル・シェークスピア・カンパニーの『リア王』に出演、②03 年には『ラスト サムライ』でトム・クルーズと共演、③05 年の『PROMISE』（『シネマ 10』122 頁、『シネマ 17』102 頁）では全編にわたって中国語をしゃべり、④『ラッシュアワー3』（07 年）（『シネマ 15』98 頁）ではジャッキー・チェンと共演、さらに⑤『47RONIN』（13 年）（『シネマ 32』246 頁）では大石内蔵助役としてキアヌ・リーブスと共演したからすごい。そんな彼の評価はハリウッドでも高まるばかりで、『アベンジャーズ／エンドゲーム』（19 年）への出演、『ジョン・ウィック：コンセクエンス』（23 年）への出演等が相次いだ。そんな中で実田広之は本作への主演と本作のプロデュースに心血を注いでいたらしい。そんな俳優・実田広之のハリウッドでの成功物語と彼の偉業に拍手！

■□■焦点(1)ーカトリック VS プロテスタント■□■

本作の焦点(1)は、カトリック VS プロテスタントだ。仏教には真言宗、浄土宗、浄土真宗、日蓮宗等、13の宗派があるが、宗派が分かれるのはキリスト教も同じ。大きくはカトリック vs プロテスタント vs 正教会だが、それ以外にも、11世紀には東西教会に分裂し西方教会と東方教会が生まれたうえ、両者ともさらに細分化された。さらに、16世紀のルターによる「宗教改革」は宗派同士の深刻な対立を生んだ。プロテスタントの誕生はこの宗教改革を契機としたものであり、ピューリタン革命（清教徒革命）というダイナミックな（血なまぐさい？）抗争劇まで生んだ。さらに近時のアメリカ大統領選挙では、「福音派」の根強い存在感もクローズアップされている。ちなみに、私が中高一貫6年間の教育を受けた松山の愛光学園はカトリック聖ドミニコ会修道院のロザリオ管区によって1953年に創立されたミッション・スクールだから宗教の授業があったし、絵画の授業ではキリストの受難等をテーマにした油絵を描いていた。それはともかく、本作の焦点(1)はカトリック VS プロテスタントの対立だから、それに注目！

他方、近代の三大発明は火薬、羅針盤、活版印刷術だが、いち早くその技術を身につけ大航海時代の先陣を切った国がスペインとポルトガル。コロンブス、パスコ・ダ・ガマ、マゼラン等の冒険家が次々と登場し、ついにアメリカ新大陸を発見。「地球は丸い」ことを理論ではなく、実践の中で証明した。それと同時に始まったのが植民地獲得競争（戦争）とキリスト教の全世界への布教だが、実はそれは表裏一体の同じもの？

戦国時代に世界に目を向けた最初の人物は織田信長。ポルトガル船が種子島に漂着した際に持ち込んだ火縄銃にいち早く目をつけたのが織田信長なら、ポルトガルやスペインの南蛮人が持ち込んだキリスト教（カトリック）に目をつけたのも織田信長だ。天才的に“開かれた目”を持っていた彼は、堺の商人たちから仕入れた大量の種子島（火縄銃）による強力な鉄砲隊を組織して戦闘のスタイルを大改革した。また、安土城の主として曲がりなりにも“天下布武”を実現した後は南蛮貿易に乗り出し、1582（天正10）年には天正遣欧少年使節を派遣したから、彼の世界に向けた目と独自の構想力はすごい。そんな織田信長の保護政策によってキリスト教は九州を中心に急速に広まったが、明国征服を真剣に考えた豊臣秀吉は次第にキリスト教の危険性を認識し、1587年に禁教令（バテレン追放令）を出したから、以降キリスト教（信者）は“冬の時代”を迎えることに。さらに徳川幕府は1612年と1614年に禁教令を出してキリスト教を徹底的に弾圧した。その結果多くの殉教者を出すとともに、1637年には「島原の乱」が起きたが、その悲惨な結末は周知の通りだ。

そんな日本では、カトリック VS プロテスタントの異同や両者の血なまぐさい抗争の物語は知られていない。しかし、『エリザベス：ゴールデンエイジ』（07年）（『シネマ18』174頁）等を見れば、それがよくわかる。本作でも、ジョン・ブラックゾーンが単なる船乗りか、それとも大砲20門も備えた船に乗っていたのだから明らかに海賊か否かは別として、ポルトガルから先に日本に上陸し手厚い保護政策の下で宣教師として大きな力を振る

っていたポルトガル人のカトリックの神父たちによるイギリス人のプロテスタントたるジョン・ブラックソーンに対する迫害と敵視は想像を絶するものだから、それに注目！

■□■焦点(2)―五大老とは？吉井虎永 VS 石堂和成の対立は？■□■

本作の焦点(2)は、五大老たる吉井虎永 VS 石堂和成の対立だ。本作のタイトルとされている「将軍」が、1603年に征夷大將軍として徳川幕府を開いた徳川家康であることはすぐに想像できる。しかし、真田広之扮する吉井虎永の対立者として、吉井虎永以外の五大老を抱き込み、吉井虎永の失脚を目論む石堂和成（平岳大）は一体誰をイメージしているの？それが石田三成だとわかると、私がよく知っている秀吉が死ぬ間際に「五大老、五奉行制」を定めたことの意義と対比して、アレレ、アレレ・・・？

さらに、司馬遼太郎の小説『関ヶ原』で描かれたように、豊臣秀吉政権下に生まれた武断派 VS 文治派の対立が激化し、文治派代表の石田三成が加藤清正を代表とする武断派大名に命を狙われる大事件が発生する中、家康の企てを看破した三成が「三成にここで死なれては困るはずの家康に敢えて庇護を求めることによって、この窮地を脱する」物語を熟知している私には大きな違和感があった。それを少し説明すれば、第1に秀吉が定めた徳川家康、前田利家、毛利輝元、宇喜多秀家、小早川隆景の五大老は当時のトップの大大名を結集したものであるのに対し、石田三成、浅野長政、前田玄以、増田長盛、長束正家の五奉行は、秀吉の側近として政治の実務を担当する、いわば「総理秘書官」のような役職だから、五大老と五奉行の位置づけ（重み、格）は全然違うものだからだ。そして、第2に、本作のように、石田三成をイメージした石堂が五大老の一人として他の大老を結集し、4対1の勢力図で徳川家康をイメージした大老の吉井虎永を大阪城内でとっちめ、その失脚と命を狙うストーリーは、私を知っている史実とは完全に違うからだ。

これについて私を知っている“史実”は、秀吉の旧知の友でもあった五大老の一人、前田利家が1599年に死亡した後は、秀吉を長い間支えた妻のねねと深く結びついた徳川家康の力が、次第に毛利、前田、宇喜多、小早川を圧倒するようになる中、秀吉亡き後、一人息子の秀頼を補佐して、気丈に大阪城の主として振る舞ってきた淀君（浅井長政と、織田信長の妹であるお市の方との間に生まれた、茶々、初、江の三姉妹の長女。井上靖の小説『淀どの日記』（60年）でも有名）と結びついた石田三成が、事実上五奉行の筆頭として徳川家康に対抗しようとしたというものだ。そんな石田三成と東北の上杉藩の家老直江兼続が結託して、東西から徳川家康を挟み討ちにしようとした結果起きたのが「関ヶ原の合戦」（1600年）だった。しかるに、本作では五大老の一人である石堂和成が、吉井虎永以外の五大老をまとめて、大阪城に赴いてきた吉井虎永を4対1でとっちめ、事実上の人質状態にしているからアレレ、アレレ・・・。

もっとも、本作は外国人のジェームズ・クラヴェルが書いた原作に基づくものだから、必ずしも史実にとらわれる必要はなく、何でもあり！？

■□■焦点(3)ーカトリック信者たる戸田鞠子の役割は？■□■

本作の焦点(3)は、カトリック信者たる戸田鞠子の役割だ。石田三成が五奉行の一人ではなく五大老の一人である石堂和成として吉井虎永と対決する本作の構成にびっくりなら、明智光秀の娘で美人の誉れ高く、また、キリシタン大名細川忠興に嫁いだ敬虔なクリスチャンとしても有名な細川ガラシャ夫人に相当する役がアンナ・サワイが演じた戸田鞠子だから、それにもビックリ。

鞠子はいち早くキリシタンになったため、ポルトガル人の宣教師からポルトガル語を学んでいた。そのため本作第 2 部で、鞠子は虎永がジョン・ブラックソーンから事情聴取する上での通訳を務めることになる。虎永がジョン・ブラックソーンに興味を示したのは、彼の日本への渡航目的、カトリック VS プロテスタントの対立構図、さらにヨーロッパにはカトリック教徒のポルトガル、スペインの旧勢力と、プロテスタント教徒のイギリス、オランダの新興勢力が世界への進出を競っている事情等だが、3 人の間でそんな会話が盛り上がるにつれて、虎永にとってのジョン・ブラックソーンの役割と鞠子の役割が次第に大きくなっていくことに。史実としては、細川ガラシャ夫人は謀反によって織田信長を死に追いやった明智光秀の娘だが、本作に見る鞠子がキリシタンになったのは一体なぜ？そして、本作全体でどんな役割を？それはあなた自身の目でしっかりと！

■□■物語の軸は？1、2 話の舞台は？キーマンの武将は？■□■

本作の時代は 1600 年。これは言うまでもなく関ヶ原の合戦の年だが、本作では亡くなった太閤秀吉の世継ぎ・秀頼が成人するまでの間、五大老が集団でそれを補佐し統治しているという設定だ。そこで吉井虎永が石堂和成をはじめとする 4 人の大老から敵視されているのは、「虎永が秀頼の産みの母親である落葉の方（二階堂ふみ）を人質にしている」という“あらぬ疑い”をかけられているためだ。もちろん私はそんな事実を知らないし、本作のストーリー上でもそれは“フェイクニュース”だが、小説でも映画でもフィクションと断れば何でもありだ。

他方、英国人の航海士ジョン・ブラックソーンが乗ったオランダ船エラスムス号が水も食料もないまま嵐の中を進み、熱海にある網代（あじろ）の浜に流れ着いたのは奇跡だ。南蛮からの漂流船が到着！そんな報告に驚いたのは、伊豆の領主・榎木藪重（浅野忠信）だ。ポルトガル人とイギリス人との区別もつかないまま、藪重の甥である網代領主・榎木央海（金井浩人）が野蛮人然とした（？）ジョン・ブラックソーンを藪重のもとに連行する任務を務めたが、本作第 1 部では、その道中におけるジョン・ブラックソーンいじめ（弾圧）の生々しい姿が次々と描かれるのでそれに注目！彼は「黄金の国ジバング！」を夢見て長い航海に臨んだはずだが、日本人からは“野蛮人”とバカにされ、ポルトガル人の宣教師からは異端派！と敵視されたのは想定外だ。ましてや、海賊の汚名を着せられて処刑されたのではたまったものではない！彼がそう考えたのは当然だ。第 1 話はそんなジョン・ブラックソーンを連行していくところから本格的ストーリーが開始するので、それを

楽しみたい。

浅野忠信は真田広之と並ぶ主役級の俳優だから、ストーリー展開上でそれなりの役割を果たすだろうと思っていると、案の定、当初は関東を支配する大大名・吉井虎永配下の武將として熱海や網代を治めている榎木敷重が、途中から虎永を裏切り、ジョン・ブラックソーンを石堂に献上しようとする動きを見せるから、アレレ、アレレ。甥の榎木央海が旅の中でジョン・ブラックソーンに対して見せる数々の残虐な行為も酷いものだ。また先行してカトリックを布教していたポルトガル人宣教師たちの英国人のプロテスタントの船乗りジョン・ブラックソーンに対する敵対心も酷い。通訳の仕事をするについては、何よりも正確に通訳すべきであるにもかかわらず、ポルトガル人宣教師は都合の悪い話を通訳しなかったり、ねじ曲げて通訳したりしているから、その姿はあまりにも見苦しい。

ジョン・ブラックソーンから何度も事情聴取する中で、虎永がそれに懲りて、ある時からは戸田鞠子を通訳に起用したのは大正解。鞠子の正確な通訳の中でジョン・ブラックソーンの話の聞くと、それが意外に面白い。そのため、「この男、なかなかやるナ。」それが虎永の偽らざる評価になってくることに。後日ジョン・ブラックソーンは吉井虎永の旗本に取り立てられた上、三浦按針という日本名まで賜ることになるが、それは二人の間に強い信頼関係と友情が生まれてきたためだ。他方、それに伴って通訳を務めた鞠子の役割も次第に大きくなっていくことに。

■虎永の大阪からの脱出は？3話以降への期待が次々と！■

司馬遼太郎の小説『関ヶ原』では、加藤清正ら「武断派」のターゲットにされた「文治派」で五奉行の一人である石田光成が徳川家康の屋敷に逃げ込み、人質同様になる姿が描かれていたが、本作は完全にその逆。「虎永が八重千代の産みの母親である落葉の方を人質にしている」とのフェイクニュースによって、石堂の目の敵とされた虎永が大阪城内に人質同様に閉じ込められ、このまま推移すれば、石堂から「切腹」を命じられる可能性まで迫っていた。そんな状況下でも虎永が冷静に鞠子を通訳とするジョン・ブラックソーンからの事情聴取を続け、見聞を広げる努力を続けたのは立派としか言いようがない。

ところが、第2話の後半では、石堂からもポルトガル宣教師からも敵視されるジョン・ブラックソーンを、虎永が安全のために自分の屋敷に宿泊させていたにもかかわらず、何者かによって命を狙われる事件が発生したから、さあ大変！この事件は当初、「石堂がついに直接、虎永を狙って暗殺実行！」と思われたが、誰にも教えていないジョン・ブラックソーンの寝所が直接狙われたのは、この暗殺事件が虎永を狙ったものではなく、ジョン・ブラックソーンを狙ったものであることを明白に物語っていた。

そのことを察知した虎永の次なる一手は如何に？こうなると、第3話、第4話への期待は膨らむばかりだ。私は1980年のTVドラマを見ているので、その展開をよく知っているが、真田広之が「ハリウッドでも本格的な時代劇を！」にこだわった本作の見事さを第3作以降でもしっかりと味わいたい。

2024（令和6）年11月28日記